資料３

令和５年５月 16 日
サル対策専門部会

令和５年度第１回ニホンザル管理検討委員会での指摘事項

１ 群れ管理の方向性の変更

(1) Ｋ１群及びＫ４群の扱いについて

ア Ｋ１群は分布域が山梨にまたがっているが、群れ管理の方向性の変更については山梨県と調整しているか。

⇒県：山梨県とは毎年情報共有を行っているが本件変更についてはまだ共有していない。ただし、山梨県は、もともとＫ１群の全個体を対象に捕獲を進めているので、Ｋ１群全体を捕獲対象とするという点で方針は一致する。

イ Ｋ１群及びＫ４群を除去しても、代わりに川井野群が侵入して同様に被害をもたらすのでは。目の前のＫ１群及びＫ４群を追い上げるよりも遠くの川井野群の侵入を防ぐ追い上げのほうがやりづらいのでは。

⇒県：地元では地域ぐるみで積極的に追い上げに取り組んでおり、Ｋ１群及びＫ４群を除去すればその追い上げに掛かっていたリソースを川井野群の侵入防止に割くことができる。地元ではＫ１群及びＫ４群を除去した後の川井野群の追い上げについても了承済み。

ウ 次のとおり４点意見を申し上げる。

①追い上げを実施したといっても、時期は９月～３月のみで通年での追い上げは未実施。回数も 30 回程度しか行っていない。銃器使用も２回程度。14～15 年前から生息しているのに、１年間の動きの比較では、群れの除去に方針を切り替える上で、根拠が足りないのでは。

②追い上げ先の地形が急峻だからという理由や、追い上げ先に他の群れがいるために追い上げができないという理由で群れの除去への方針変更が成り立つなら、これからそのような理由での除去が多発する。

③モニタリング結果の活用と併せて、例えば、T1 群に対して作成したようなポテンシャルマップを作成し、効果的な追い上げ・追い払いに活用することなどを考えるべき。

④Ｋ１群については、行動域も山梨県中心であり、群れの除去を急ぐことはないのでは。

エ 無駄な取り組みを避けるため、Ｋ１群は山梨県と同時に対策を行う必要がある。

オ （検討委員会後に別途いただいた内容）「追い上げの効果が見込めない」ことをどのように判断したのかが不明確。

また、銃の怖さを感じたことがないサル個体にとっては、銃器による追い払いは爆音器と変わらないのでは。

(2) 丹沢湖群の群れ管理の目標頭数を 30 頭から 20 頭に変更することについて

丹沢湖群は２年連続で出産が確認されておらず、群れを維持する観点から 30 頭目標のまま

捕獲せず静観する方向も検討すべき。

２ 日向群における地獄檻型囲いわなの使用

ア 捕獲を意図していないサルが入った場合はどうするのか。

⇒県：毎日の見回りを行うとともにセンサーカメラで監視し、捕獲を意図しない個体を確認したら放獣する。

イ 今後、シカ・イノシシの檻としてのみ使用する場合も、サルが錯誤捕獲される可能性を考慮すべき。

ウ 地獄檻の中に小さな檻を入れて処理を容易にするとあるが、大変そうで、イメージがわかない。

エ（検討委員会後に別途いただいた内容） 屋根をふさぐのは大変だと思うので、サルだけが登れる細い梯子のようなものを立てかけておけば良いのでは（目的の個体が罠に入るようになったことを自動送信カメラで確認してから、梯子に何か細工をして登って出られなくする等）。

３ 令和５年度ニホンザル管理事業実施計画（令和５年度の事業実施計画）について

ア 広域防護柵の設置について、ある地域で広域防護柵が老朽化し補修もされず機能していない状況を見た。他の対策に注力する選択肢もあるのでは。

⇒県：地域によってはしっかりと点検・補修しサル対策として機能している所もある。そういった場所の事例を共有して生かしていきたい。また、地域で対策にかけられる労力が限られる中で、何を優先して優先するのかということも含めて支援していきたい。

イ 鐘ヶ嶽群において、農地の利用割合が増えつつあり、今後加害化して群れを除去せざるを得ない流れになり得る状況。農地への依存度を下げるための追い上げ等の計画をより具体に検討すべき。

ウ ダムサイト群とダムサイト分裂群が合流しつつあると考えられる状況で、両群れの間に捕獲方法に違いがあると現場で混乱が生じるため、揃えておいたほうがいい。

エ R4 年度生息状況調査報告書に記載のあった、「科学的根拠に基づく加害レベル(加害性)の再評価」や「ポテンシャルマップ」の作成についてぜひ進めてもらいたい。

オ（検討委員会後に別途いただいた内容） 実施計画の別表２ 川井野群について、「被害が発生した場合は、個体数調整を実施する」とあるが、個体数調整だけで被害が減少する訳はないので、個体数調整だけで対策をするような書き方はやめて頂きたい。